

EurekaXIV

六年制通信 No.3 令和8年4月24日(金)号

特効薬は、たぶん、ない

前回は、運の無駄遣いをしないためには何事にも時間をかけて準備を怠らないことが大切で、それを阻むのは面倒臭いと思う心だという話をしました。では、面倒臭いと思う心をどう克服すればいいのかと誰もが考えることでしょう。私も今までに面倒臭いに何度も負けてきましたし、何とか打ち勝った経験もあります。今も（おそらく毎日）面倒臭いと戦っていると言っていると思います。でも、面倒臭いを克服する方法はない、特効薬は、たぶん、ないと思います。日常生活に面倒臭いことはたくさんあるでしょう。しかし、同じことでも人によって面倒臭いと感じる程度は大きく違うと思うのです。掃除を面倒臭いと思う人もいれば、掃除が大好きな人もいます。つまり面倒臭いと感じる気持ちは非常に個人的なものなのです。面倒臭いことがあるのではなく、個人の中に程度の差こそあれ面倒臭いと思う心があると云った方が正確ですね。ですから万人に効く特効薬などないと思うのです。

君たちの場合は掃除ではなく勉強することに面倒臭いを持ち込んではいけませんが、これも個人差が非常にあると思います。すでに予習・復習が習慣になって授業の準備も定期テストの準備も面倒臭いと思わない人もいるでしょう。テスト勉強は面倒臭いと思いながらも何とか克服して、きちんと時間をかけることのできる人もいるでしょう。面倒臭いが行き過ぎて、教科書を開くことも単語を覚えることもノートをとることさえも面倒になってしまっている人も、ひょっとしたらいるかもしれません。

中には、勉強が出来なくて、でも本当はできるようになりたくて、頑張りたいけれど一人ではできなくて、何から始めていいかも見失って苦しんでいる人もいないのでしょうか。そういう君には「平凡な毎日に負けるな」と言いたいと思います。「面倒臭い」と口に出してはいけませんよ。一人の時に言ったとしてもそれを君が聞いていますから。自分の口から出る言葉は自分の心にじかに届きますから気をつけなさいといけません。消極的なことを発せず、「よし、頑張ろう！」と言ってみることです。

面倒臭いとは少し違うかもしれませんが、勉強ができるようになりたいけれど何をしたいかわからない人は、恐らくすぐに結果が出てほしいと思いつぎてるのではないかと思います。勉強を始めようとする、目の前に大変な負荷が待っていることだけはよくわかっているのです。今日頑張ったら明日できるようになっているのなら、誰だって頑張ります。昨日と今日の変化、今日と明日の変化が微々たるもの過ぎて目には見えないし、実感も持てない。それですぐに諦めてしまう。机に向かうことも面倒臭くなってしまいます。自分で自分に×を打つことに慣れてしまう。

これ、永遠のテーマだと思うのですが、昔からよく「馬を水辺に連れて行くことはできても、水を飲ませることはできない」と言われています。聞いたこと、あるでしょ。

「飲む」という行為は強制されてできることではなく自分の意思によって行うしかないということです。私たちは君たちに水を用意することはできると思います。いや、美味しい水は私たちの手を借りるまでもなく君の周りにいくらだってあるのです。のどが渴いていない馬は水を飲みません。たとえどんなに美味しそうな水が目の前にあってもです。水を美味しく飲む方法はのどを渴かすことだ、というのも昔から言われていますが、これも正確に言えば自分ののどを渴かすのは他人ではなく自分だということを忘れてはいけません。君たちの場合、のどを渴かすモチベーションは将来こういう職に就きたい、こういう人間になりたいという強い思いではないかと思えます。「憧れ」と言ってもいいかもしれません。ただ、これもまた他人が君の憧れを決めるわけではないわけです。自分がどうありたいか、それを自分で決めなければなりません。自分の将来なのですから、自分で決めるのです。それが自分を大切にする第一歩ですよ。

ちなみに私の経験では、面倒臭いの克服は行動するのが一番だと思っています。勉強する気になるのを待って、つまり心の準備ができてから勉強しようとするのはダメですね。心は行動についてきます。時間がかかることは覚悟して、まず行動。100を101にするのは簡単ですが、0を1にするのはエネルギーが要ります。最初の行動が最も困難で最も肝心ということですね。自分には無理なんて思っははいけませんよ。

今週のおすすめ

・岡部えつ 『嘘を愛する女』 (徳間文庫)

映画「嘘を愛する女」の脚本は中江和仁・近藤希実だそうで、この本は岡部さんが小説版として書き下ろしたとのこと。それで、映画を観ていないとわかりにくい描写がいくつかあったわけかと、読後にわかりました。

主人公は大手食品メーカーに勤務する由加利。恋人の桔平とは同棲を始めて5年になる。もうそろそろ結婚、と思うのだが桔平は「自信がない」と言うばかり。

しかし由加利の母に会う約束をようやく取りつけ、二人で待っているが桔平は来ない。それどころかその日は家にも帰って来ない。そこへ病院から電話。桔平が交通事故に巻き込まれ意識不明であると告げられる。ところが、研修医であるはずの桔平の職場には「小出桔平」なる医師は存在しない。彼は嘘をついていたのか。彼の親族のことも何も知らないことに今更ながら驚く由加利。大好きな桔平は一体誰なのか。そもそも小出桔平という名前も嘘なのかもしれない。私は誰と5年も暮らしていたのか。彼の財布からコインロッカーのカギが見つかるころから事態はまた動き出します。探偵まで使ってコインロッカーを見つけ、その中にあったパソコンには小説らしき文章と写真が数枚入っているだけ。それだけの手掛かりで桔平の真相に迫る由加利と探偵が見つけた真実とは…。こういうこと、つまり素性の分からないまま暮らしている若い二人は本当にいるような気がします。本より映画を観た方がいいかな、これは。

BGMは Uru の それを愛と呼ぶなら でした…。